



Title	キャンパスネットワーク
Author(s)	富永, 昌治
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1995, 98, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66119
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

キャンパスネットワーク

大阪電気通信大学情報工学部教授 富永昌治

一般の人々にとって、最も身近なコンピュータネットワークの利用法の一つは、ネットワークによる電子メール (e-mail) であろう。私もこれを重宝しており、海外へ出張した時も、先方のワークステーションをお借りして、研究室のワークステーションにアクセスしてメールのチェックをするよう心掛けている。また必要なファイルを put, getで伝送する。今年の初め、サバティカルで滞在中の大学教授を米国のマイクロソフト社に訪問した。このとき教授のワークステーションから私にきているメールをチェックしたことがある。30～40通のメールリストを見て、その先生が何日間に来たメールかと聞くので、5～6日だと答えたら、驚いたように我々の一日分だといった。私はその数に感心させられたが、その反面、本当にどの程度必要な情報かしらといふかった。

実際私のところでも、到着するメールの数はこの一年増加の一途をたどっている。しかし明らかに不必要と思われるメール情報も確実に増加している。当初は、電子メールの普及により、まず会議や出張の回数が少なくなり、またハードコピー（紙への印刷）が不要になると期待したところがあった。しかし最近、face-to-faceの人間関係を重視する我々日本人にとって、メールのやり取りだけでは重要な意思決定はできず、やはり一堂に会してからということになりそうな予感がしている。すなわち自己主張を避け、相手の反応を感知したり、“場”の雰囲気を感じ取るような議論の進め方に慣れている人にとっては、何回メールを往復させても、一日の会議の方がはるかに効率的ということになる。結論的に、会議や出張の回数は期待したほど減少しないし、逆に開封しなければならないメールの数は増えるばかりである。我々は明らかに情報過多に陥っている。

情報は少なくすることはできないが、単なるメール交換から脱却してネットワーク利用の質的な変換が迫られている。例えば、mail, rlogin, telnet, wwwサービスはあくまでも個人的な利用形態であるが、ネットワーク本来の平面的な広がりを持った利用法とは？

本センターニュースは“キャンパスネットワーク”を特集している。キャンパスネットワークはコンピュータネットワークの応用事例として、極めて興味深いものと考えている。本特集号を企画するにあたり、教育広報委員会では、各大学でユニークなコンピュータネットワークを構築されたり、また新しく構築中のものの情報をORIONS加盟大学に広く求めました。この中で特に、大阪電気通信大学、関西大学、大阪市立大学、奈良先端科学技術大学院大学、和歌山大学のネットワークを選んで、ここに紹介していただきます。キャンパスネットワークは各大学固有の思い入れがあり、研究の促進は当然として、学生の教育サービス、分離校地や附属小中学校との一体化、事務局や図書館との接続など、狙いはいろいろです。本特集号はネットワークの実現例を提供し、これからの計算機センターとネットワークサービスのあり方を検討するうえで、有用な情報になりうると思います。

本特集号を企画するにあたり、教育広報委員会の第1小委員会の皆様、委員長井口先生、下條先生はじめセンターの皆様にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。